

つくることを考えてみよう

つくること
に
答
える
こと

壁画 輝ける子どもたち

二〇二五年の五月、有志の子どもたちと弓指さんは、昭島市内の戦争の遺構やアキシマクジラが発掘された多摩川の河川敷、八高線の歴史の現場をめぐる自分たちの街の歴史を知りました。その後、図工の授業で自分たちの未来について、描くことを通して考えました。この経験を踏まえて、弓指さんと子どもたちは昭島の歴史と未来を壁画で表現しました。壁画は二〇二六年一月から学校内に展示されています。



つくることを考えてみよう 応答すること

もくじ

2 輝く礫はみんなの疾走を照らした
六年生のみんなへ

6 I 応答すること

子どもたち十九鬼先生+かんちゃん

21 II 例えば寄生虫のように大きな宿主の体内に入り込んで
勝手に自分のライフサイクルを作って生きてるみたいになー
弓指寛治インタビュー

25 III 新自由主義の時代に生きる〜教育現場へ期待すること
戸館正史



輝く礫はみんなの疾走を照らした

六年生のみんなへ

宮下美穂 特定非営利活動法人アートフル・アクション

みんなは礫という言葉聞いたことはありませんか？

紙礫というと、投げつけるために紙を丸めたもののことを指します。

礫はただの石ころのことです。

けれど、礫は歴史の中ではいろいろな活躍をしてきたものでもあります。

昔、農民が飢饉や圧政によって苦しめられた結果、

一揆という抵抗の戦いを起こしました。

農具の他には武器を持たない農民が自分たちの暮らしを守るために立ち上がり、
投石(石を投げる)という手段に出たときまざまな歴史書に書かれています。

*一揆(いつぎ)

室町時代、戦国時代等に国一揆、土一揆、一向一揆などの集団による大規模な武装蜂起によって、起こした張本人たちが政権を倒し自治権を得たという事例が残っている。しかし一揆は住民たちが目的(怨)をひとつにすることを指す言葉で、必ずしも武装蜂起としての打ちこわしだけとは限らない。

かんちゃん(弓指寛治)が生徒として学校に通う最後の日、一月二日、
五年一組と二組合同の大鬼ごっこやだるまさん転んだをしながら、

みんながグラウンドを駆け回るようすを見て、

私はかんちゃんは、学校という塀やフェンスに囲まれた世界に投げ込まれた
ひとつの輝く礫だったのだろうと思うようになりました。

もちろん投げたのは農民でも百姓でもありません。

それから、礫は、

神様が宿る依代でもあったということを思い出しました。

*依代(よりしろ)

神様や霊が現れるための媒体(メディア)となる樹木や石などのこと。

ちょうど一昨年の一二月から、小さな礫のかんちゃんは、
みんなと休み時間に鬼ごっこをしたり、給食当番や掃除、体育をしたり、

算数や理科や国語の勉強をしたり、テストを受けたり、
図工室で絵を描いたりするようになりました。
時には、街の中にある戦争の記憶や記録を巡ったり、
ガンダムの絵も描きました。
下校の時間に一緒に歩きました。

みんなはかんちゃんが学校にやってきてどんな感じがしましたか？

かんちゃんは、どうやら、みんなと過ごした時間がとても楽しかったようです。
外から投げ込まれた礫のかんちゃんは、抵抗のための礫ではなく、
みんなと同じように生徒となりました。

そして、学校生活の中で当たり前だと思ってスルーしていたことや
どうせダメだって諦めていたこと、
めんどくさいから放っていたことに、
「それちがうんやない？」

「ええんか？」
と問いかけました。

あるいは、学校では評価されることが少ない「迷路」や「三点倒立」に感動して
「すげーっ」

を繰り返していました。そんなことをしているうちに、
小さな礫はどんどんみんなの中の見えにくかった部分に光を当てることになりました。

布でおにぎりを作ったりノートや教科書に絵を描いたりしたこと、
鼻の下に鉛筆を挟むこと、

映画の撮影をしながら、空を飛ぶ飛行機を動くように見せたこと、
楽しいこと、得意なこと、発見したことを試してみること、

頑張って進めることがどんどん良きことになっていったはずです。
そしてかんちゃんも、ますます楽しくなっていたと思います。

みんなはお互いを照らしあう仲間になりました。

気にも留めなかった、大したことのないやりとり、
見過ごしてきたものがとても大事なものだということ、
それを流してしまわないことで、目を瞑らないこと、
礫もみんなも両方が変わり、

そしてこれからも変わっていくことができるようになったのではないのでしょうか。

礫は、武器や争いで、力づくで、あるいは、学校にある「常識」に従うことで何かを変えたのではないように思います。大事な友達がやりたいと言うから応援する、面白そうだからやってみる。

そうして、みんなの得意分野（それはみんな自身です）に光が灯ったように見えました。

学校は教えるところ、学ぶところであるかもしれませんが。

けれど、私は成績や勝ち負けより前に、まずみんながそれぞれに異なるひとりの人であり、好きなことや得意なことが違って、そんなことはあまり関係なく、まずは、ひとりひとりがその人として丸ごと尊ばれて欲しいと思います。

学習は、喜びや好奇心が発動しなければ、本当の学びにはなっていないと思います。知識と学びは異なります。

その時に、学校の自分、遊びの自分を分けていたら、好奇心は萎んでしまいます。

かんちゃんの

「それ、めちゃええなあ」

「ええやん、ええやん」

と言う声がいつまでも聞こえてきます。

〈大人のみなさまへ〉

二〇二四年一月から二〇二五年一月にかけて、アーティストの弓指寛治さんが光華小学校四年二組、進級して五年二組に、生徒として滞在しました。

小学校にアーティストが滞在するプログラムは、昨今、あまり珍しくはなくなりました。いろいろなところで実施されています。しかし、往々にして、アーティストが持っている表現技術や考え方、主題によって子どもたちを先導することが多いような印象を受けます。教える人、教えられる人、の構図がここでも生きています。さらに、アーティストの表現として子どもの存在が使われてしまうこともあります。

今回のプログラムを実施するにあたり、委託者である私からは、ひとつだけ、弓指さんに対して、アーティストの作品としてこの経験を回収しないで欲しいと言いました。そして弓指さんはひとりの人として、子どもたちの前における意味裸ん坊の状態で投企されました。

学校という制度は、複雑な隘路に陥っているようにみえます。社会に出てきちんと働くことができる大人になるために、人に迷惑をかけないように、生きていくのに困らないように、しっかりした大人になるという目標がすでに瓦解しています。この、戦争や排外主義、拝金主義が横行する社会に、自分を押し殺して合わせていくことのできる「我慢強い大人」になることが教育なのかということに多くの人が困惑しています。

あるいは、大人は、自分のしたいことをするために、自由を手に入れるためには、ルールや約束事を守って、手続きを踏んでみんな

と合意し、やっと自分のやりたいこと、自由を獲得することができるといいます。そんな強さが時として求められます。しかし、私は強くなければ生きられない世の中は少しおかしいかもしれない、と思います。赤ちゃんやお年寄り、障害がある人たちや他所からきてくれた人たちと好きなように生きられる方がずっと楽しいはず。

言葉で、ひとりひとりを大切に、違いを認め合う、ということは具体的にはどのようなことなのでしょう。

この小冊子では、学校で過ごした弓指さんが見たこと、感じたこと、弓指さん自身について尋ねてみたことを中心に取りまどめました。また、最後の論考では、国家が教育を通して子どもをどのように取り扱っているのか俯瞰しつつ、これからの子どもたち、私たちが生きる社会を考えます。全体としてはとりとめがなく、筋が通っていません。パラパラと思いつきのように書かれた文章がパッチワークのように散らばっています。そのひとつひとつを、何かの折りにぜひ開いてみてください。輝く子どもたちがあちらこちらにいるはず。

本プログラムは、東京都、東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人アートフル・アクションの三者の共催により「多摩の未来の地勢図をともに描く」の一環として実施いたしました。ご理解、ご協力をお願いしました光華小学校の生徒のみなさん、保護者のみなさん、先生方、そして弓指寛治さん、伴走してくださった千葉大学の平藤まなやさんに心より感謝申し上げます。

I

応答すること

子どもたち+九鬼先生+かんちゃん

学校に子どもたちと先生がいる。

その毎日に突然かんちゃんが現れた。

いろいろなことが毎日起こる。

子ども同士、先生と子ども、子どもとかんちゃん、そして、自分と自分、

全方位に光が飛び交うように、エネルギーのやりとりが透けて見えてくる。

子どもは全身でできごとを感知し、反応する。

知らないのは大人ばかりなり、ともいえるくらい、

いろんな気づきに満ちている。

先生だって、子どもといることで幸せだったり、

何かを考えてウンウン唸ったりしている。

縦横に響きあいながら、皆がそこにいること。

それが教室というものかもしれない。

このページでは、五年二組担任の九鬼先生の

考えていること、感じていること、

みんなの声、そしてかんちゃんとみんなのようすを記します。

壁画ってさあ

限られた人での協力だからちよつとなんか・・・

運動会の方が緊張する。

壁画を描いている時とかはさ、

誰も見てこなくてただ

自分で集中して描いている。

ま

言う言われたことすく言うんだったら
言いなりみたいだから、

ちよつと考えてから学校に相談しようって。

まじモンペは論外

あまのこ先生スターペアレンティング

モンペ？



弓指 寛治 ゆみさし かんじ

1986年三重県生まれ。2015年に母の自死を経験。以降、死者の鎮魂をテーマのひとつとする。自死、満洲国、路上生活者といった社会や歴史に焦点を当てる作品群を発表。また、各地の芸術祭に運営側としても参加し、キュレーションに携わる。

2024年12月から2025年12月までの1年間、昭島市立光華小学校に生徒として通学し、子どもたちと机を並べてともに過ごす。

そのようすをFOAM CONTEMPORARY（銀座 蔦屋書店、東京）において「4年2組」として発表する。

「第21回岡本太郎現代芸術賞」敏子賞、「VOCA展2021」佳作賞、「第2回網谷幸二芸術賞」奨励賞、CINRA Inspiring Awards山戸結希賞など受賞。

主な展覧会に「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか?—国立西洋美術館65年目の自問 現代美術家たちへの問いかけ」(国立西洋美術館、2024年)、「不成者」(内原郷土史義勇軍資料館 水戸市 (2025) など多数。

子どもたちに接する上での 礼儀だと思っんです

私は平凡な五年生だったと思います。子どもたちに「先生、小学校の時どんな教科好きだった」って聞かれたら、体育って答えるんです。逆に「嫌いな教科あったのって」聞かれたら算数かなと正直に話します。

先生は立派でなければいけない、いや本当に立派な人になりたいという私自身の心持ちはもちろんあります。ただ立派な人って言葉でわかるような気がしますが、どうしていけないのかすごく悩みます。とりあえず先生だから体裁を保たなきゃいけないと思ってる方もいらっしやると思うんですけど、私は素直な、嘘をつかない自分を出した上で、あ、先生、頑張っているんだな、くらいが伝わればいいと思います。正直でいることが子どもたちに接する上での礼儀というか、私なりの考えです。

私が教員として、ビシッとやって、勉強ちゃんとかやらなきゃダメだよっていう価値観を教え込んでいたら、将来の仕事の間口は広がるような気がします。保護者の方としては、安心といえば安心かな。一方で、教員という立場上、教科として教えなきゃいけないこともあるんですけど、勉強以外のところにも楽しみあって多いよ、いろんなこと楽しんでほしいな、と思います。

かんちゃんっかッぞ

かわいいじゃ、もうちよじと違つんじやないかっとか、
かんかこれ、もっかかんかしっかり言ってくれるから、
他の大人と違って、
人によってはず、
なんか差別してくるんだよ。

差別してくるかもしれない。

あとね微妙なこと言ってくるから、
しっかり言ってくれなから。

確かにとか、
うっつたばりさっつな、



街歩きするとき、

俺あの時かんちゃんは
絶対雨生徒だっと思った。

★

「俺吉入れて」

「俺吉」

「俺吉入れるー」

あ、マスダ先生写真撮ろう

かんちゃんいた

かんちゃんきてー

かんちゃん来てユミサシカンジ!

呼び捨ては良くないよ

ユミサシカンジ様!

弓指寛治 二回目の小学校生活を終えて

二〇二五年二月二日(火)

二〇二五年の小学生生活が終わった。昨年と同じ時
僕の二回目の小学校四年二組として転入し、春に
期に昭島市立光華小学校四年二組として転入し、春に
は五年二組へ進級した。結果的に一年間、だいたい週
三ペースで学校に通い続けたのだけれど、このプロジェ
クトの依頼を受けた時は数カ月で終わるはずだった。
僕は他にいくつもの展覧会や作家仕事を抱えていたし、
学校の都合もあるだろうと思っていたからだ。でも実際に通い
始めてみると小学生の日々は面白かった。想像していたよりも遙か
に楽しかった。だから一年間でガンダム展、四年二組展、カンジユミ
サシギャラリー展という同級生たちが関係する展覧会
を三つもやったんだと思う。



正解がないから先生も考える

その時は一生懸命やって、正しいと思ってやってきたことも振り返ってみてたら、あれは間違ってたなとか、あれってすごく良かったとか、無駄だったなとか、別に、みたいなことを感じることもあるので難しいですよ。

子どもも、今の彼らの価値観と五年後の価値観で考えたら、五年前の自分、バカだったなって思うかもしれない。五年生の彼らが今、例えばよくわからん下品なこと言ってるのは楽しいのかもしれないですけど、五年後にそれを振り返った時に楽しい思い出と言えるかどうか、その心持ちってどうなんだろう。でも正解がないから、先生も考える。あの時を振り返ってうわ馬鹿だな、恥ずかしいことしてんなって恥じるような子もいれば、あの時はあんな馬鹿なことやってのんきだったな、はははって思う子もいる。ひとりひとり違うと思う。

チクリマン！

最近チクリマン多いよね

先生「チクリマン多すぎますよ、チクリマン多すぎますよ、チクリマン多すぎますよ」

でも喋るんだよ

うん、でも喋る



サ

クラスはフワフワなウサギが好ま、本人もウサギの様な女子動物何と、と聞かれた時「ウサギ好きなと答えたら」「ウサギスって？」「ウサギスかな」「生虫やよ」と言うのと「ええ...」と引いていた。それからウサギとはいろいろな話をした。僕の育った家庭環境があまりよくなかったことなども伝えた。その五年生になったある日、給食前の教室でタマキが静かに近いていた。僕はタマキに「どうした、何かあった？」と聞いた。彼女は「うん別に、大丈夫」と返す。「そうか、わかっただけでいいよ、給食を取りに行ったのだけれど、戻ったとき、声をかけようとしてたらアタシと腕を叩かれた。振り返るとウサギがいて、そのとき、おはよう」と言われた。

ミ

ウはクラスの中でもお姉さんの女子で、ダンスが得意。体育でダンスをやることになった際、僕は流れてミウ達のチームに入りHAWA「Blue Jeans」という曲を踊ることになった。「えー俺ダンスやったことないんやけど」と嘆くと、「うちらが教えてあげるから大丈夫だよ」とミウと双子のミウをはじめ女子たちが振り付けと覚え方をレクチャーしてくれた。

初めは踊る事に抵抗感があったけど、彼女たちが真剣に教えてくれるので、「これはちゃんと覚えた方がいいな」と思うようになり、学校からアトリエに帰ると夜な夜な二時間くらい踊り、振り付けを体に入ってきた。お披露目の日も中休みにメンバリー全員で振り付けを確認し、最後のオチのようなポーズまで指定されて本番に挑む。初めにミウとユナのダンス経験者コンビが披露、その後で僕とミオリ、アヤカの三人で踊った。練習した甲斐あって下手なりに踊れたと思う。クラスの皆には笑われたけど、それも含めて良かった。ミウたちにも「いいじゃん、でんじゅん」と褒めてもらった。

教室に戻りさっきの体育の話をしている時に僕のダンスがダサかったとコタロウが揶揄してきたけれど、ミウが「あのダンスはちゃんさんの表現なんだから全然ダサくないよ」と反論。コタロウが「表現って何？」と素直に言うので、「コタロウが絵描くやん？あれ描きたくって描いとるやろ。ミウとか俺は踊りたくて踊ってたんやよ、やりたいと思ったことを真剣にやるんや」と表現っていうんやで」とめっちゃ真面目な言葉が口をついて出た。あれはダサかった。





図工楽しいよ

かんちゃんがいちばんがいいな。

そうだよね いたほうがいいよね。

ほんとそれ。

三

オリ、キホ、ヌストラ、カホとはシール交換という「文化」を通して仲良くなった。女子達はそれぞれシール帳を持っていて、気に入ったシールを交換することでコミュニケーションをとるもので、実用的なものとしてのシールではなく交換することによって重きが置かれている。僕はこれまで女子より男子の方が仲良くなる率が高かった。でも図工の時間にキホからシール帳の存在やどこに行けば買えるのか等々を教えてもらい、早速学校の帰りに新宿へ行ってみた。シールを選んでみると、これが楽しい。危険動物や鉱石シール、ボンボンドロップ系をたくさん買った。オリシール帳を作って学校帰りに女子達に見てもらおう。「シール帳を作ろうよ」「この中なら一枚どれでもいいよ」と見せてもらったシール帳にはシールの種類や配置の仕方に几帳面さや適当さなど個性が出ていて「このシール帳ミオリのじゃない？」と見て「このシール帳ミオリのじゃなかったね」僕が聞くと「そうだよよくわかったね」とミオリが笑った。

リ

ヨウタロウ、ユウマ、コタロウ、ミツキと下校に着いた。ミツキは「カバン置いてチャリで追いかけるか」と家の中へ。残りの男子がふざけて「隠れようぜ」と言う。「えー」と僕が拒否すると「かんちゃんそついうのダレいって」と強引に扉の後ろに隠された。しかし、しばらく待ってもミツキの自転車は全然やってこない。「あれ？」と僕は顔を出してあたりを見渡したけどミツキの姿はない。「先行ったんじゃないかと彼らは走り出した。僕も一緒に走ってリョウタロウやユウマ、コタロウの家に向かう。でもどこにもミツキはいなかった。で何で？」と僕は焦って「もしかしたら家に戻ってるとか？」と来た道を引き返すことに。帰宅しチャリに乗った男子達と僕はミツキの家まで走る。「ミツキのチャリあった！とリョウタロウが大声で言った。ピンポンとインターホンを押すと玄関ドアが開き「さけるチーズ」を食いながらミツキが出てきた。「家おらんかい！」と汗だくの僕が思わずツッコむと「パパに家で勉強しろって言われたからさあ」とミツキが言った。その後さけるチーズを皆に配っていた。

難しいね
ガムガムして
ガムガム

親や先生以外の大人の価値観って 今の子どもたちにとって なかなか会う機会がない

私以外の大人の価値観、親以外の大人の価値観って子どもたちにとってなかなか出会える機会がないです。

ある規範とか正しさは、とても大事だし、それが人を救うこともあるけど、でも何かこう経験を縮めてしまうこととかもあるような気もして、その塩梅が結構難しいですね。子どもはね、難しいもので、禁止されてないことを許されてると思ってる節があるんですよ。だから大人はダメ、禁止、という言葉が言いがちなのかな。

今の学校ってどうしても一斉に動かざるを得ない部分とか出てくると、ひとりひとりに対応するのは難しいんじゃないかな。

もう二組に戻ってくるまでかんちゃんに敬語使うよ

でもユミサシカンジさんが帰ってくるまで敬語を使う。

ユミサシさんになりました。

朝とか会ったら、「ユミサシカンジさんおはようございます」っていうの。

俺のね、おのね、おはあちゃんのね、戦争に行ってたの。

ひいおばあちゃんの兄弟ね、海軍になって、

型崩し紙の面倒くさかったか、海軍に帰って、助かったって。

俺それで、フエツツ入

自分の価値観を押し付けちゃっている時は伝わらない

子どもたちに私の言葉が伝わらないことは多々ありませんね。自分の価値観を押し付けちゃってる時は伝わらないです。僕がわかっていないんです。本当に。自分自身の言葉であつたり行動であつたり、その子との関わりであつたりということが、きっと私の言葉を届かせなくしてる。この子には伝わらない言葉だったんだろうなっていうのは、やっぱり考えなきゃいけない。私自身も私なりの価値観があるので、絶対こっちの方が生きていく上でトラブルも起こりづらいと思ってる。ある種の自分の経験からの言葉を伝えてるので、聞いてくれないと自分を否定されたような気持ちになっちゃうのかもしれないが、聞いてくれなかったら、「そっか今の君にはこの言葉はまだ届かないか」ぐらいにして、頭の片隅に残っていて、五年後ぐらいに「先生、礼儀大事だとか言ってたな、挨拶なんて誰でもできる一番最初でめちゃくちゃ大事なことだからやった方がいいぞ」と言ってたとかいうのが、まあ五年後ぐらいに届けばいいかな。

ユ ウタイは五年生になつてから恋バナをしてくれたり大人がいかに信用できないか話を話してくれた。特に大人が話す言葉やアイツら言ってることをやってることとが違うじゃねーか」とよく怒っていた。僕はそれを聞くたびに「いやーほんまユウタイの言う通りやで、大人はクソや」と応答した。

僕 はユウイやサトル、カナデたちが授業中にタブレットを取り出し先生に気づかれないように虫ビンをさすゲームやブロック崩しをしたりイラストを描いたりしている姿を見ると怒らされた。たまにそれがいきすぎると怒られていたけれど、そもそもクキ先生は皆が隠れてタブレットをしていることなんて気づいてると思う。もちろんアヤやセイヤナツキみたいにタブレットをせずに真面目に授業を聞いている子もいる。ユウカちゃんは教室にいたりカーテンの裏に隠れていたり好きなようにして、それも良かった。

あーれないー
そして紫。
これぞ、壊れた街とか再現するのとかさういうんだよ。
ゴジラの？



牛乳の件——九鬼先生は黙ってご飯を食べ続けている

もし、彼が牛乳を投げる瞬間に私がそこにいたら、介入していたんですけど、私が気づいたら投げた後だったんですね。そうなってくると、彼自身のどういう心情がそういう行動を起したか、私自身が何もわかってない状態で、その牛乳を投げたという行為だけで私がブチ切れたら、多分彼の心に何も入らないだろうな。うん、彼がなぜそういう行動に移ってしまったのかっていうのを私が見極めないうちにしゃしゃり出ると悪化する可能性がある。今、彼はどういう状況なのかっていうのを私が一旦ちょっと見極めたいので、一旦見させてもらいましたね。肌感覚として。

牛乳を巡って教室がわあわあ言ってる中で、それこそ弓指さんが「あ、そうや、一番の被害者はミツキやんな」とか言った。面白いですね。そうなった時に彼にはミツキは関係ないっていう気持ちはあった。そこに対しては「ミツキ、ごめん」っていう言葉が出たんですよ。「ミツキが悪いんじゃない」って言って塞ぎ込み始めた。「ミツキごめん」というのを聞いて、話せるレベルではあるな、じゃあ、と思っちょつと話してみた。

かんちゃん 三八歳。

俺のおばあちゃん 八〇歳だよ。

普通に俺のおばあちゃん 一歳で死んじゃった。
うん、ガンで死んじゃった。



★

一緒に帰りませんか

ははは。面白いね。

敬語になると本気で言ってるかどうか
わかんなくなっちゃうね。

なんとなくね、話す内容も変わる。

今日一緒に帰るんだよ

ユミサシカンジさん一緒に帰りましょ

文

化祭「こどものまち」の最終日が終わり、お屋

に下校することになった。僕と大学院生の平藤さんがランチを食べ、うと学校を出て歩いてるとトラジとナオタロウが近づいてきた。「一緒にランチを食べたい」と言うけれど「それはきつと学校に食られるからやめとこ」と僕は答えた。トラジが「今家に帰ると午後から野球の練習に連れて行かれるんだよ」と嘆いているのでナオタロウは「一三時まで時間潰せば間に合なくなるから遊べるんだよな」と状況を説明してくれた。「そうなんや。じゃあそれまでフラフラするか」といって四人で昭島の街を歩き、公園で時間を潰した。そこでトラジが本当は練習に行きたくないこととやナオタロウが魚の絵が好きな理由など聞いた。一三時になったので僕らが学校に戻るとそこにはカンカンに怒った先生たちがいてトラジのお母さんから心配の電話が学校に届いていたことが発覚しめっちゃくちゃ怒られた。





待ってもらえないと待てない

相手がそれを受け取ってくれない状況を先に考えるというか。自分がこうだったというのよりも、結局相手がそれを受け取ってくれなかったら言ったところでしょうがない。やんわりとは伝えることもありませうけれど。

子どもたちへの介入のタイミングなんて、教員になる時には教わらない。きっと、育ってきた家庭の中で、私は待ってもらえてたんですね。私自身が。待ってもらえないと待てないですよ。いろんな人がいる小学生時代で、周りの人や子どもへの想像力も、親や地域の大人や友達に囲まれて育ったことも関係あるかもしれない。

だから、ただ彼ら自身のね、この時を大切に思ってるからこそ、教員として長くいたいんだろうな。

子どもたちをみている、今、こいつ悲しいかもしれない、とか感じることはありません。気をつけてはいますけどね。わかるとまではなかなか言えないですけど。でもそこを筋論で言われると違ったりするじゃないですか。あ、この子今とても悲しいんだと思うのは理屈ではないですよ。



★

印

象的な出来事は無数にあって書いても書いても書ききれない。

学校を去る少し前の給食中、モグモグタイム（黙食時間）が五分ある（）にミツキとユウタイ、リョウタロウの話を見ながら分かつミツキの顔にも？が浮かんでいた。一瞬何が起ると潰れた牛乳パックが転がり床には白い液体がべったり流れ出ていた。「牛乳？」みたいな反応を四人でしたその時、教室中央あたりに座っているコタロウが「お前ら何なんだよムカつくんだよ！」「と彼の後ろに座っているセイイチロウとレンにキレて流る。さらにもう一本牛乳を手にしてレンの方に投げつけた。レンには当たらずまたこっちの方に飛んでくる牛乳。どよめく教室。黙って食事を続けるクキ先生。「コタロウまたキレてんじゃん」とユウタイ。ドンドン、机を叩き箸を投げ器をひっくり返す。固まっているセイイチロウとレン。牛乳でベタベタになったジャケットを僕達に見せて笑うミツキ。「タロウがさ、俺が嫌だって言ってるじゃん、それなのに何回もさあー！ウゼんだよ！ウフアアア！」とコタロウが絶叫し泣き出した。クキ先生がそれをなだめる。全然関係ないっぽいハヤタが「そうだぞーお前らが悪いんだろ！」「と謎の介入を始める。前の方ではイブキが「牛乳余ってるの誰も飲まない？」と質問している。「てか一番の被害者はミツキじゃね？」とか誰かが言った。女子達は呆れて食事を再開しているようだった。

給食の時間が終わり揉めている連中を尻目に一人ずつ勝手に食器を片付け出す。「ミツキの服やばいって」と周りの奴らで服に付いた牛乳を拭き取っていると泣いていたコタロウが「ミツキ、ごめん」と謝っていた。ミツキはちゃんと謝れるんだとミウがツッコミを入れる。僕はつい笑っ

イブキの机の上に置いてあるのが見えた。いつの間にかコタロウと先せんがっしている。イロハが「二人なこと前にもあつたよね」と話しかけてきたので

頭に何かのつしゆぶ

あの先生に片の米の...

あつた、いふか、ちりきり...

あつた、いふか、ちりきり...

「やよな。皆慣れとるからこんな
冷静なんかも」と相槌を打った。セイ
イチロウとレンは「正直今回は俺たち
が悪いっていうかちょっと言い過ぎちゃっ
たところがあったかも」とえらく真面目に状況
を分析していた。

僕が席に戻ろうとしたとき、目の前のイブキがブ
シャー……と勢いよく白い液体を嘔吐。うわあ！イブ
キがもとしたー！「やべえ！」騒然とする教室。そりゃあん
だけ飲んだらキャバオバーやる」と声をかけると口を拭って
「へへ、大丈夫」とイブキがニヤツとしていた。「どこが大丈夫
やねん」とトネに言われていた。アイミが「今日の五年二
組やばすぎじゃない？カオスだよ」と苦い顔をしている。
誰かが呼んできたクキ先生が吐瀉現場へ向かう。「先生
大変やなあ」と僕がタマキに言うと、「ツイてないね
と冷静な一言。

吐瀉物処理に取り掛かるため持ってきたバ
ケツを机の上に置き、手袋を装着しようとしたク
キ先生を見て「おい！俺の机の上に置くんじや
ねえ！……！」とハヤタがブチキれた。急にキレた
ので何のこともわからないけれど、今にも先生に飛
びかかりそうだったハヤタを抑えた。「どうした？」と
聞くと「こちらを一切見ずに「デメエ……それをさっさ
とどけろ……誰が許可したんだよおお……バケツをど
けるおおおお……！」と罵りまくっていた。バケツをど
ケツを置いたのがハヤタの机だったことに気づいたっぼく
すまんすまん、という感じでバケツを退けた。それでもハ
ヤタの怒りは取まらず「デメエ！謝れよ……！何やって
んだよおおお！」と泣きながらキレ続ける。まあまあ、
で謝ってくれるよ」と怒りを鎮めようとしたけど、
あんま効果はなかった。

直接の当事者じゃない同級生達は「やばい
とか」「最悪の日だ」とか「ほんとこのクラス
やだ」とか口々に言っていたけど、どこか
楽しそうでもある。彼ら彼女らがこれか

らも生きていって一〇年二〇年
が経った時に思い出す小学校のこととい
えば今日なんじゃないかなと僕は考えて
いた。今ここに光華小五年二組が詰まっ
ているように感じたからだった。

この日、怒りが爆発したりゲロが飛び
散ったけど、学級崩壊しているわけ
はない。ある面ではこのクラスはこんな
もんだと多くのクラスメイトが受け入れて
て、このクラスらしいと思っていたはず。学校や
教室ってこんな風だった、自分のクラスはこんな
だったと思いつける日が一日でもあれば、それだ
けで小学校生活ってのは充分なんだと思う。
僕もきつたこの日のことを忘れる」とはなし、
一〇年か二〇年後にまた思い出すんじゃないかな。
とてもいい思い出として。

最近足が速くなりましたね
ユミサシカンラさん
全然鬼ごっこしてない

ユミサシカンラさんと
たまには鬼ごっこしたい。

大人とは

大人って、自分よりも他者ってなった時じゃないで
すか、感覚としては。ヤングケアラミみたいな場合も自
分よりも他者が優先される。そういう、環境がそうせぎ
るを得ない状態にするっていうのではなく、私の中では、
選択できる範囲があった上で、自分で選んで他者への
気配りができるかっていうところかなって思う。あまり
にも選択できない、やらざるを得ない結果の他者はただ
のサポートになっちゃうので、ちょっとまた意味合いが
変わるかなって感じはします。



お互いに人として 接してるなっていう感覚

教員をしていて好きな時間は、子どもが放課後残って勉強教えてって言うてる時間かもしれないです。一人対多数ではなくて、一対一に近いというか、その空気が好きです。許されるのであれば、彼らが居たいだけ教えてあげたいんですけど、「四時になったら帰りたい」とか言わなきゃいけない。私としては、子どもがよくわからないと言ってる時に「いやいや、やり方は一緒だよ、数字がね、ちょっと大きくなっただけでやり方は変わらないから大丈夫だよ」って。そんな風に放課後残ってる子たちに言うてる時が一番先生してるかもしれない。ある意味授業中よりね。



★
なんかよく走るから
息が持たない
あ、でもなんか走ってからなんか、
なんか走っても走っても無限に走れるようになった

かんちゃん、五年になってちょっと頭良くなったと思う。
初っ端だったら、今やってる問題、分かんないと思う。
ちょっと成長したと思う。
でも、点数は良くない。



立場ではなくて人として 接してるのが好きなんだよね

わかるようになっていくというより、そのやり取りそのものがもう嬉しい感じ。もちろんその結果、分かるようになってくれたらより嬉しいと思うかもしれないですけど。単純にわかんなくなる、わかんない、二回、三回同じこと聞かれても、むしろ「こうじゃなか」とか言いながら、そういうやりとりがいいっていうか面白い。それでいうと弓指さんと感覚が近かった感じがする。その瞬間っていうか、その場面においては、まあ児童と教師なんだけども、なんかちょっと友達に近い感じ。友達にさ、ちょっとね、「九鬼、教えてよっ」って言われたことと似ているって感じですよ。そっちの方がお互いに人として接してるなっていう感覚はあるな。立場で接してないっていう、人として接してるのが好きなんだよね。

★
昭島くじらになんか被せて描いてって言った。
だからめっちゃ緊張した。
昭島くじらの上になんか魚を描いて。めっちゃ緊張した。
あれがシンボルでなんか。
ミスったら変になる。
うん。てか今何時だ。
やあばっ。

II Interview

例えば寄生虫のように大きな宿主の体内に入り込んで
勝手に自分のライフサイクルを作って生きてるみたいにして
弓指寛治インタビュー

自らの内にある体験や記憶と外側にある他者の切実さを接続させて制作と向き合う

弓指さんの姿勢からは、どんなときも他者への繊細な思いやりを垣間見ることができます。

率直な言葉から独自の批評性を読み取っていきます。

インタビュアー…戸館正史、宮下美穂

◆学校は好きでも嫌いでもない

一回目の小学校生活は好きでもない嫌いでもない、普通。そういう印象です。それなりに楽しいこともあったし辛いこともあったけど、そんなもんかなーって思ってた。小学校ではサッカー少年団に所属していて、水土日曜日に練習をやっていました。習字、そろばん、水泳とか習い事もやっただけど全部あんまり続かなかった。

サッカーやっていた友達とは今でも年末にフットサルをやるんですよ。だからほぼ毎年顔を合わせてるんですけど、そこでも小学校の話はまったくでてこないですね。あの先生がどうだったとか、こういうことがあって〜とかも特にしゃべらないです。でも、まーそんなもんだらうなーって。

小学五年の時、僕が授業を明らかに聞いてなかったからなんですが、教室の後ろに立たされたりしました。そこでも懲りずにふざけていると教室の前に

立たされるんです。あれは恥ずかしかった。

同じ時期に何が原因だったかは覚えていないけど廊下呼び出されて先生に往復ビンタされたこともありました。

「お前は(ピシ!)いつも(ピシ!)自分の事を(ピシ!)棚に上げて(ピシ!)よくも・・・」って。でも僕の心は繊細とかではなかったのしんどかったわけでもなかった。ただ怒られるたび「先生ムカつくなあー」って思ってた。だから反省もしないし、親にも報告しないし学校に訴えもしない。平気で何にも考えてなかった。学校に行くのが嫌になることもなかった。

所属していたサッカー少年団の監督がクソ怖かったです。ミスしたらブチギレて怒鳴るしボールもぶつけてくる監督で、見た目も完全に大阪のヤクザみたいでした。グラデーションのある薄い茶色のサングラスをしてヒトラーみたいなチョビヒゲに金のネックレス、ゴリゴリの関西弁。ミスしたら「ユミサ

シイイ!お前何しとんじゃボケェ!」って。

P.T.Aのお母さんたちは「かんちゃん怒られる量は異常じゃない?」って心配してたそうです。だから監督に比べりゃ先生なんかたいしたことない。腹は立つけど「監督よりはマシ」と思っていました。でもその僕の態度が先生方にとっては癪に障るんだと仰っていました。

◆非当事者が語らなかつたら

語ることもどんどん難しくなっていく
たとえば東日本大震災が起こった時、被災地に行った非当事者がその惨状を見て「こんな大変なことになってるぞ!」っていう発信をしたことってありませんよね。もちろん必要なことだと理解しています。それは大前提なのですが、災害支援の方々、ジャーナリスト、アーティストなどさまざまな立場の人からの発信がありますよね。

特にアーティストが見たり聞いたたりしたことを作品にするという行為にはす

ごく慎重に敏感になります。「ちょっと行って見てきただけちゃうか」みたいなのは作品からも作者の言葉からも立ち振る舞いからも透けて見える、と僕は考えています。初めから言いたいことは決まっています。その材料に被災を使っている「ように見える」ことがあって、あれはやばい。でも、同時に当事者だけが語れることを許されて非当事者が語れなくなる世界ではやがて誰もそのできごとについて語らなくなるし聞きたくなくなるのも思っています。だからどういう塩梅で非当事者が関わられるのか、がすごく重要なはず。

東日本大震災が起きた時は僕は名古屋にいて、特に生活面で震災の影響を受けたという記憶はありません。それより自分の事業が軌道に乗らず安い仕事をとくさん抱えていて仕事は多いお金がなくて辛かったことを覚えています。仕事場に行く途中、ビルの看板に「頑張ろう東北！頑張ろう名古屋！もう負けられないぞ！絆」と書いてあって「何やねんそれ」とシラけていました。だから自分と震災の精神的距離はずっと遠いままだった。

二〇二二年開催のリポーンアート・フェスティバル*に招聘されました。石巻市の旧南浜地区で津波に関することに取り組んで作品を作ってほしいという依頼で、聞いた時はまず「僕にやれることなんかない」と断ろうと考えました。「まあ一度だけ現地に行ってみてよ」と促され足を運びました。そこで津波が迫る中、小学校から脱出した用務員

さんの話を聞いたんです。それがきっかけで震災を生き延びた人たちに興味が湧きました。あんなに大変な状況の中をサバイヴした話はやっぱりすごくて面白くて。そして生死を分けたモノに明確な理由なんかない。そんな話を人づてに聞いていくうち「これならできるかも」って気持ちに変わっていききました。

作品は直接震災や津波のことを描いたというより、たとえば海についてだったりします。漁師さんは海に出るじゃないですか、船で。そこで生活してる人の話を聞いたりすると海とか波について恐ろしいだけではない面もいっぱいあるってことに気付かされていく。あの体験も良かった。だから、アプローチの仕方によっては、できるんじゃないのかなっていう感覚が強くなっていった。「被災地の人々が大変でこんなに辛い」って内容でなくても、もしくは政治への不満材料としての津波とか原発とかスパー堤防とか、そういうことをテーマにしなくても震災についてやれることがいっぱいあったんです。

*リポーンアート・フェスティバル

宮城県石巻市で二年おきに開催される芸術祭。初回は二〇一七年に実施された。目指さんは二〇二二年に朝吹真理子さんと「スウィーティング・タウン」という作品の制作を行なっている。

◆先生がダメって言ったから

今までチクられとったやつはやっぱりチクる側に回りたくなる。当然です。チクるって行為は個々の『正義の心』から発動することが多いんやと思う。やつらの言う『正義』は、つまりルール

を破っているかどうかの判断だけなんです。そのルールとは先生の言葉です。教室の後ろの出っ張りに腰掛けていたら「そこに乗っちゃいけないだよ」と指摘する、みたいな。「なんでいからの」と聞くと「先生がダメって言ったから」と返ってくる。「先生が言っとっただけやん」って返しても通じないんです。

先生には先生の『大人の側の立場』がありますよね。たとえば誰かが『悪いこと』をして誰かがそれをチクる。そして当人を呼び出して「そのようなことはしてはいけません！」みたいな話になり、後日その行為はクラス全体でNGに発展する。そういう時に僕は「ああ大人のこと嫌いやったんや」って思い出しました。そやそや、『大人』ってこんなことする生き物やったなあって。

『学習に関係ない』というワードで僕がやっていることにNGがでたことがあった。具体的にはシール帳を持ってきちゃダメという先生からの通達でした。シール帳は主に女子達のコミュニケーションツールで、それを放課後に見せたり交換して遊ぶというもの。シール帳を教えてもらってそれがすごく楽しいものだど知ってからはクラスメイトと新しい共有の話題になっていた。僕の知る限りではシール帳を巡って誰かが傷ついたりトラブルに発展したこともなかった。だから『学習に関係ない』って本当に？という気持ちはどうしても出てきてしまったんです。『学習に関係ない』というのはそれを禁止するための方便として言っているのもちろん分かっている。それでも何かおかしいんじゃないのかなっ

という気持ちの方が湧いてきて、このワードによって僕が制御されようとしているのを、内心で拒絶しているところが多分あった。

ただ僕は外部の人間なので指導に沿ってシール帳を、それ以降学校に持つてくることはやめたし、それに伴ってシールに対する興味は一気になくなっていった。先生が悪いわけではなく興味への盛り上がりという現象は簡単に膨らむし簡単に萎むものなのかもしれない。

光華小の文化祭「こどものまち」でカンジユミサシギラリーを開きたいって思いついたのも学校がある程度方向づけをしたルールの中には想定されてないものを作りたいっていうのがあったからだと思う。ちょっと崩したいっていうか、大人が決めた枠の中だけでやるのはあんま面白くないって気持ちから自分なりに別枠を用意してやってみたいっていうのがあったんじゃないかな。これも大人の作ったルールに反発して全て破壊してしまえっていうわけじゃなくて、既存の枠の中に別の枠を作ることとを僕が大事にしているからだと思う。たとえば寄生虫のように大きな宿主の体内に入り込んで勝手に自分のライフサイクルを作って生きてみたいに。

◆知らない人を想像することはとても難しい

授業って面白いんやなか、算数の計算することって面白いんやなっていうのを、感じたこともあった。隣の席の勉強のできるやつに分数の計算の仕方を教えてもらって。「そーや！これで

な、ここ消してな！そうそうそう」とか言って。一〇分間で計算問題を何問とけるか「一緒にやろうぜ」ってやつとるときは本当に面白かった。ぐんぐん解けていく感覚。僕はずつと算数が苦手だったけど決して算数という学問がつまらないわけではないというのを実感したんです。

しかし教科書の内容がつまらないってことは先生にちゃんと言ってほしいとも思った。改めて気付いたのは教科書に載っている内容が国語も社会もめちゃくちゃつまらなかったってこと。教科書の本文を読む気にならないのは子どものせいじゃない。教科書内容が致命的につまらない。

国語の教科書に小五の女子が広島に行って原爆の慰霊碑を見て名前しか記載されていないひとびとに想いを馳せしんみり手を合わせる、みたいな話が載っていたんです。「この名前しか残らなかった人たちはどういう気持ちだったんだらう？」とか書いてある。先生が「彼女はこの時にどういう風を感じたでしょうか。主人公の気持ちになって考えましょう」って。でもこれは主人公の気持ちじゃなくて書いてる作者が勝手にこういう感じって雰囲気を書いたフィクションの言葉でしかなくて。少なくとも僕はこれまで生きてきて慰霊碑に記された名前だけを見ても心は動かなかった。知らない人を想像することはとても難しい。なのに「主人公の女の子はとても悲しかったと思います」というような模範的解答が求められるんです。あの教科書を作った人は五年生をナメてると思った。

「先生にはこの少女の気持ちなんか分からないです」と言ってほしいし、人の気持ちをマジで想像させたいのなら題材はドロドロの浮気話とかにしたらいいと思う。浮気が発覚した時、夫はどう思ったでしょう？とか。きつと面白いし、五年二組なら盛り上がるはず。よっぽど人生の学びにもなる。

◆そこにいる人がただ面白いから

僕は国立西洋美術館での展示*のために山谷に通い始めました。山谷*という地域に対して先入観がなくて純粹な目でみている、みたいなのはまったくないです。最初は「怖いな」と思ったし。人生でドヤ街というのを見たことがなかった。こんなところに来てしまった、路上生活者や彼らを支援をしている人たちと自分がうまくやっていけるとは思えへん、と考えました。だから先入観はあった。

上から目線で見てるっていうことは確かにないけど、僕はやっぱ「路上のおじさんたちの話は聞いてって面白いな」って思うのがいちばん。だから多分今も続いているんです。この人たちはほんまスゴイなって思う。スゴイってというのは尊敬する意味の「スゴイ」の時もあれば、めちゃくちゃ過ぎるっていう意味でスゴイなっていうのもある。「自分にはそんなことは絶対にできひん」みたいな話を聞くのが好きなんです。人と接する時のこういうスタンスは山谷、光華小、石巻、珠洲、どこに行っても一緒かもしれません。

★国立西洋美術館での展示

二〇二四年三月二日(火)～五月二日(日)
に国立西洋美術館で行われた「こは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか?」
—国立西洋美術館六年目の自問—現代美術家たちへの問いかけ」において、司指さんは山谷を主題にした作品を展示した。

★山谷

台東・荒川区区にまたがる通称「山谷(さんや)地区。日雇労働者が居住する簡易宿泊所が密集している、いわゆるドヤ街。戦後の高度成長にもなつて、全国有数の「寄せ場」(仕事を探すために集まる場所)として発展したが、日雇労働市場の縮小、働く人たちが高齢化したことなどにより役割を変えつつある。簡易宿泊所が廃業を余儀なくされ、跡地にはマンションが次々に建つ一方、地域の生活保護受給率は東京都全体の平均を大きく上まわっており、いまや山谷は福祉の街ともなっている。

僕にとつて、絵を描く、っていうのは人に見せるっていうこととセットなんじゃないかと思います。自分の家に置いておいて保管したり眺めたいっていうモノじゃなくて、いざれ展覧会のような機会があつて、そこで展示したい、発表したいっていう気持ちがある。こんなに面白くてスゴイと思つている目の前の光景を自分ひとりが体験しているだけっていうのはきつと違う。紹介したい。「まじサイコーやからぜひみてほしい!」っていう気持ちがあつて描くんやと思います。本当に「めっちゃ面白い!」と思つとるだけなんですよね。その面白さをもつと他の人にも伝えられたら。それが絵とか展覧会をやり続けている理由のひとつです。

面白いことの中身は全部個別です、光華小学校も山谷も。

山谷っていうとドヤ街とか路上生活のおじさんたちを想像する。僕もそれが最初に出てくるけど、山谷という街

に関わる人の中には訪問看護師さんもいるし路上生活者を支援するNPOの方々もいますよね。

訪問看護師さんは路上生活もしていないし、山谷的破茶滅茶人生を送っているわけじゃない。でも訪問看護師さんの話も抜群に面白いんです。看護師さんたちの振る舞いや考え方、たとえば死生観もそれぞれ違う。「死」についてただ単にネガティブなもの、触れにくいものっていう風に考えていない方もいるんです。看取りの現場で笑つてしまうようなできごとが起きたりするんですね。そうするとそれを不謹慎と言つて蓋をせずに「笑つてしまった話」として普通に話として成立させている。こんな風に話すこと自体が多くの場面でタブーになることですよ。ね。「人の死を笑うな」みたいな。でも「面白かったんです、その方の最後が」みたいな語りが山谷では成立することだつてある。

そんな風に経験を語つてくれる看護師さんたちは僕は魅力的だと思つています。山谷といえば日雇い労働、ドヤ街、ホームレスっていうようなステレオタイプな見立てがある。けどそこにはもっといろんな人達の複雑でさまざまな関係もあるんです。そういう意味で僕が面白いと感じることはそれぞれ個別です。

◆父さんの日々

ある時期、東京で単身赴任をしていた父さんが失業して伊勢に帰つてきていました。どうやら勤めていた会社が潰れたらしいです。父さん怖いし「毎日家におるの嫌やな〜」つて思つてたんです。そしたらある日、僕が学校から帰っ

たら父さんが旅行バッグみたいなものを持って立っていて「寛治、俺出てくから」つて言う。「あ、そう」つて返事をした。そのまますれ違つて出て行つて家のドアがしまつた。しばらくしてから「……っしゅー!!」つて拳を握つて声を出したのを覚えています。

キレると怒鳴つたり殴つたりする人だったので僕も嫌な思いをたくさんしたけど、妹と弟もそうだった。弟は本当に小さい頃一〇円ハゲができてました。その時はなんなのかわかつてなかったけどあれはストレスだと思ふ。

でも当時の父さんは仕事も母との関係も上手くいかなくなつて、酒を飲み自暴自棄になつていて自分の感情をまったくコントロールできなかつたのかもしれない、とも思っています。

父さんからは僕が高校三年生の時「お前大学行くのか」と連絡があつたのと、母さんが死んだ時に僕から連絡して亡くなつたことを伝えてました。「線香あげに行く」つて言つたんです。四九日の終わりぐらいに来て線香をあげていました。姿を見たのはそれが最後です。

※インタビューは、二〇二五年一月、新大久保駅近くで実施しました。

III

新自由主義の時代に生きる―教育現場へ期待すること 戸館正史

社会実装の三〇年

どうやら近頃は社会の役に立たないということ、世間的にちょっとマズいようです。もちろん、いつの時代でも、何かの役に立つことの方が役立たないことよりも尊ばれるでしょうが、この日本という国で、とりわけ失われた三〇年といわれる停滞期にあつて、この件は加速度的に深刻な事態を生み出しているいき、きつとそれは、学校や教育の場においても何か支配的な空気を生み出してしまっているのではないかという仮説が本稿の入口になります。

社会実装という言葉を目にする機会が増えていきます。ChatGPTへの言葉の起源を尋ねたところ、一九九〇年代後半頃から科学技術政策の文脈で使われてきた用語だそうです。大学等における研究成果を産業化して経済力を高めていく一連の施策において社会実装という言葉はあちらこちらで謳われていたに違いありません。この言葉と考え方はいつしか、机上のアイディアや理念を社会のなかで実行させていくことを指すものとして定着していきます。とりわけ近年は文化芸術界限においてアートを社会実装するというような表現も目立っています。社会との関係性によってアートを実践としていくことや、アートを福祉や教育に活かしていく取り組みなど、社会がアートを要請し、アートもまた社会を要請しつつある状況において社会実装は時宜を得た言葉として重宝されています。いずれにせよ多種多様な社会課題を抱えた現代では、あるべき社会像を構想して成果を得るために、何かを社会に実装していくことが求められています。しかし一方で社会を構想してい

く、ポジティブな動力の裏にあるネガティブな要因にも目を配る必要があるでしょう。

新自由主義の席巻と教育基本法

バブル経済が崩壊し、長期の不況に入った日本ではにわかには有用性や効率性を偏重していくようになります。八〇年代半ばからくすぶり始めていた新自由主義の隆盛です。国は市場経済に公共サービスを委ね、富の再分配に消極的となり経済的な格差は拡大し、個人を経済的な価値を生み出すために動員するかのような思想が世の中を覆っていきます。加えて、新自由主義による不安な世相を回収するかのようにして保守主義あるいはナショナリズムもまた台頭していきます。このようないわば政治が先導していった右傾化を象徴する成果のひとつに、一九四六年の制定以来一度も手が付けられることのなかった教育基本法改正（二〇〇六年）があります。例えば改正基本法の教育の目的（第一条）を見てみましょう。

「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」

一見、素敵なことが書かれているようにも思えます。では、一九四六年制定の改正前の旧基本法の同条項と見比べてみます。

「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値

をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」

ほとんど同じようですが、比べてみると、改正基本法に込められた明確な意図が認められます。改正基本法では「国家及び社会の形成者として必要な資質」と書かれています。つまり国家は個人に先立つものとしてあり、個人は国家に役に立つことが求められています。一方で旧基本法は個人が尊重されたうえで国家があると読み取ることができます。改正基本法の第二条では「国と郷土を愛する」や「公共の精神」が、さらに第六条では「規律を重んじる」ことも明記されています。また一六条では国は「教育に関する施策を総合的に策定」することが求められており、閣議決定によって教育振興基本計画を制定できることになっています。戦前の国家主義に基づく教育への反動としての旧基本法から改正基本法はマイルドな衣を纏って再び国家の介入と大きな価値観や規範に資する教育を打ち出すようになっていきます。そして当然ながら教育制度にもメスは入れられ、教育改革の名の下に全国学力テストや学校を選択する自由などの導入によって競争や効率性が重視されてきているのもご存知のとおりです。一方で、日本の政治は二〇〇九年から三年間、民主党政権の時代に入り「新しい公共」が謳われていきます。競争が煽られ自己責任が問われる社会が生み出した格差や分断や孤立を埋め合わせるようにして、対話や多様性を重視し官民の協働によって社会の公共性を担う実践が推進されていきます。

基本法の改正後、学習指導要領は二度の改訂がありました。現行の学習指導要領では道德の教科化をはじめ、個々の能力を重んじていく教育が示される一方で「主体的で対話的な深い学び」や「社会に開かれた教育」が求められていきます。すなわちここでは新自由主義的な要素をベースとしながらも「新しい公共」の方向性もまた打ち出されているわけです。保守的な要素とリベリズムの要素が相互の角を落とすか

のようにして共存している状態とでもいったらよいでしょうか。

こうした状況にありながらも、個々の教育現場においては学習指導要領に基づいて「総合的な学習の時間」を活用して創意工夫を凝らした授業も生まれています。光華小学校における「子どものまち」もそうした取り組みのひとつといえますし、アーティスト等が学校でワークショップなどを行うプログラムも今や珍しくはありません。往々にしてこうしたクリエイティブな試みにおいても、子どもの主体性やコミュニケーション能力、協働する力などを育むことが課題となります。いわば社会に適合できるためのスキルを会得させていくという目的がそこにはあります。すなわち、あえていうならば、ここでは社会に役立つ人間を育成することが求められているのです。

主体性と自己責任論

ここで思い出すのは、私が小学校での演劇ワークショップのコーディネートをしたある演出家の言葉でした。彼はあまりワークショップが上手ではありませんでした。上手ではないというか、私が理想とするワークショップをしてくれないのです。私の理想は子どもたちが少しでも自由に、主体的に(↑)、他者と対話できるようなワークショップでした。しかし、その演出家は、子どもたちをコントロールしてしまうのです。私はその点について疑問を呈しました。するとその演出家はこう言いました。

「そんな主体的、主体的って言われても、しんどい子もおるねんぞ」。

今から考えても、そのワークショップ自体を私は肯定的に評価することはできませんが、彼の核心を突いた言葉は印象に残るものでした。アート界限が「主体的で対話的な深い学び」のニーズに合わせ開発してきた主体性やコミュニケーション能力を育む類のワークショップは、場合によっては個人に責任を帰す要素が秘匿されていることもあり得るのです。生活に

おけるさまざまな選択や判断を主体的に行うにあたって、その関与に応答し続ける態度を責任とするならば、確かにその主体性には責任が伴うといつてよいかもしれません。問題は個人では背負いきれない責任を個人に帰してよいのかということにあります。

私たちが有している所与の権利を放棄しなければならぬような責任の負い方を容認することが、新自由主義的な自己責任論です。すなわち「主体的で対話的な深い学び」において主体性や自己判断の尊重に重点が置かれた場合、そのある種のリベラリズムは新自由主義的な自己責任論と隣合わせになり得るのである。あるいは「主体的で対話的な深い学び」という教育の目的が教育基本法第一条に掲げられる「国家及び社会の形成者として必要な資質を備え」ることにあるとするならば、新自由主義的価値観で覆われた国家及び社会においては「主体的で対話的な深い学び」ですら、図らずとも自己責任論を補強する可能性があります。

しかしその一方で「主体的で対話的な深い学び」という多分に行間の含まれた文言は、教育現場にとつては一元的な価値観に回収させないための余地としても機能しているといえます。「国家及び社会」に役立つ人間を育てていくことではなく、大きな価値観や道徳観のオルタナティブを構想する人間を育てていくことのできる余地が、まだ教育の現場に残されているはずで、それは子どもたちとの日常のコミュニケーションのなかに潜んでいるような気がします。

待つことから見えてきたこと

仕事柄、学校を訪れることが時々あります。子どもたちのコミュニティにある暗黙知の文化のようなものや、子どもがオモテに現さない気持ちや言葉に対して、先生が介入している場面に遭遇することがよくあります。先生は子どもたちに対して訊いたり促したりします。良かれと手助けしたり、場合によっては叱ったりします。教育的配慮の観点からは別に間違った対応ではないでしょう。こういう光景を目撃すると決まってある先生から聞いた話を頭をよぎ

ります。その話を聞いたのは音楽科教諭の集まる研究会でした。議論のテーマは歌わない子どもをどうやって合唱に参加させるかというものです。あれやこれや、歌わせるためのアイデアが飛び交う中、場違いな感じのジョークを履いたその先生がやたら話し始めました。

「僕はギターを弾くんです。弾き語りですね。それでクラスの歌を作るんです。毎日必ず帰りの会でそれをみんなで歌うんですね。あるクラスを受け持った時、どうしても歌わない子がいたんです。歌わないというか、歌うことができないんです。表情を出すことのできない子でした。それでも僕は歌ってほしくて、その子の目の前でギターを弾いて歌ってみせるんだけど、やっぱり歌わない。しょうがないですよ。それからしばらくして、その子が成人になってから僕に会いに来てくれたことがあったんです。そして、言ったんですね。先生、僕、クラスの歌、歌えるよ、って、歌ったんです。あの時、その子もちゃんと参加していたんですね。無理やり歌わせなくてよかったです。待つことって大事なんですよ。」

メモと記憶から語り口を思い出して再現したので正確なドキュメントではないですが、この先生の嬉しそうな顔が伝わるでしょうか。待つという態度は、声や表情や行動から見ることのできない何かを見ようとする対話なのかもしれません。そしてそこには、その子の主体性を重んじた内省に対する傾聴があります。それはきつと先生にとつても深い学びとなります。それに違いません。ところでこの話は私としてはとっておきなのですが、研究会での他の音楽科教諭たちの反応は冷ややかなものであったこともお伝えしないといけないでしょう。合唱を歌うことは楽しい、音楽はみんなにとつて楽しいもの、クラスの和を尊ぶ、とする前提を外すことのできない議論にあっては、このエピソードは響かなかつたのかもしれない。確かにあの歌わない子どもは、二声なり四声なりの混声合唱のハーモニーを構成する声を発していなかっ

たという点では、全体に資していないわけです。役に立っていないといってもよいかもしれませんが。でも本来に何の役にも立っていないかったのでしょうか？待つことの大切さをその子は先生に教えてくれています。そして、歌わない子を無理強いせず待つ先生の姿から、子どもたちは何かを学んだかもしれません。結局、視点や立場の違いによって、役立つものも役立たなくなり、役立たないものも役立つことがあるということなのです。合唱への参加が是であること、効率よく稼ぐこと、国益となること、そんなふうな大きな価値観の反対側にある小さな価値観を可視化していくこともまた本当は教育の役割のほうです。

小さな価値観の公共性

小さな価値観というのは要するに、たつたひとりのためであつてもなくてはならないものを大切にすることです。別のいい方をすると、私はそれを公共性といつてよいものだと考えています。しかし公共性に関する議論はなかなか厄介であつて安易にこの言葉を使うことはなかなか悩ましいものがあります。例えば現行の学習指導要領によつて教科化されている「公共」を巡つての問題点に立ち返れば「公共の利益」や「社会の一員としての責任」等によつて学ぶにあつて、その公共や社会を誰がどのような立場で規定するのかを問う立場もあるからです。この点については、全体主義国家における公共の概念がどういふものであるのかを考えれば論を待つまでもありません。すなわち公共性には常に大きな価値観、マジョリティの利益を孕んでいるのです。それでもあえて公共性には小さな価値観が宿るものであると考えていかないと、逆説的ではありませんが、子どもたちにとっての公共性の皆である学校から、歌わない子どもを待つことのできる教員はいなくなつてしまひます。そしてもちろん、弓指寛治のようなアーティストが、学校という常態化しているシステムにノイズを持ち込むことも阻まれることでしょう。

織り重なるナラティブ／弓指寛治のアート

光華小学校での本プロジェクトにおいて、弓指寛治は小さな価値観を体現していたように思います。そもそも現代美術のアーティストである彼は、一般社会にいるときであつても異物でありノイズであつて、むしろその度合が強いほど、アーティストとしての独自性も可能性も評価も高まるものでしょう。ただ、弓指さんの場合は、自らが直接的にノイジーな存在となつたり表現をしたりというタイプではありません。ぬるりとずっと前からそこに居たかのようにどこかに身を置きながら（教室に身を置きながら）、出来事や歴史に補助線を引いて物事や事実をズラしながらそこに複眼性をもたらししていきます。弓指さんの絵画作品は消失点を無効化しているように見えますが、これはまさに複眼的な視点の表れといえるものでしょう。そして、イエスカノーか、白か黒かの表現とは一線を画す弓指さんの態度が表象するものは、大きな歴史や大きな声や大きな価値観が覆い隠してきた小さなナラティブではないでしょうか。

本プロジェクトでは昭島に残る戦争遺構や太古に生息していたアキシマクジラについて子どもたちは学んだといひます。役に立つたものも、役に立たなかつたものも、成功したことも、失敗したことも、助けたことも、殺したことも、それらが織り重なる時間や史実の上に、私たちは暮らしているはずなのです。ネガのない写真がないように、ポジティブだけの世界はないはずです。オモテもウラも、その間のグラデーションも、それらが一緒くたにある教育の現場がたくさんあれば、光明はきつと差してくると思ひたいものです。

戸館正史

専門はアートマネジメント、文化政策。アーツ前橋学芸員（教育普及）、（一財）地域創造芸術環境部専門職等を経て二〇二三年度まで愛媛大学社会共創学部寄附講座助教及び松山フンカ・ラボディレクター、二〇二四年度まで港区みなと芸術センター研究機能専門参与を務める。市民主体による自治的な文化活動を展開するための制度設計や中間支援、ワークショップの企画やファシリテーションなどを手掛ける。港区文化芸術活動サポート事業調査員、四国学院大学、愛知大学、青山学院大学、各非常勤講師。社会福祉法人来島会アートプロジェクト監修。共著に『芸術と環境劇場制度・国際交流・文化政策』（論創社）、『アートはいつ（アート）になるのかアート化とは何か』（水曜社）等。



つくることを考えてみよう 応答すること

発行日 2026年(令和8年)3月31日

制作 特定非営利活動法人アートフル・アクション

デザイン アサノリエコ

写真 金子愛帆 ★印は事務局

発行者 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス5階
電話:03-6256-8435 FAX:03-6256-8829
www.artscouncil-tokyo.jp

本書に関するお問い合わせ先

特定非営利活動法人アートフル・アクション

東京都小金井市本町6-5-3シャトー小金井2F

TEL/FAX:042-316-7236 mail@artfullaction.net

<http://artfullaction.net/>

*〈多摩の未来の地勢図 cleaving art meeting〉は「東京アートポイント計画」として実施しています。
東京アートポイント計画は、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」をつくるために、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、地域社会を担うNPOとともに展開している事業です。実験的なアートプロジェクトをとおして、個人が豊かに生きていくための関係づくりや創造的な活動が生まれる仕組みづくりに取り組んでいます。

主催:東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人アートフル・アクション

ISBN978-4-909894-66-3 C0070

*本書の無断複写、複製、転載を禁じます。

©2025 npo artfull action

